

# 書 評 と 紹 介

中澤秀雄／嶋崎尚子編著

## 『炭鉱と「日本の奇跡」』

——石炭の多面性を  
掘り直す』



評者：谷合 佳代子

本書は、2008年から活動が始まった「産炭地研究会」の10年間の研究成果である。213頁の中に日本の炭鉱百数十年の歴史と現在を収めた意欲作であり、平易な記述によって読みやすさと楽しさを覚える入門書としても位置づけられる。

炭鉱と言えば地底の過酷な労働、災害、鉱害、といったマイナスイメージが喚起されることが多いと思われるが、著者たちは「否定的イメージをもたれがちな炭鉱の意義を二十一世紀によみがえらせようと企画した」(p.12)という。本書のタイトルの「日本の奇跡」とは、戦後の高度経済成長を指す。高度経済成長期に忘れ去られた石炭が、郷愁としてしか理解されないのは「大変な誤りであり、損失である。高度経済成長と昭和史、その延長線上にある現在社会を真に理解するためには炭鉱を理解する必要がある」というのが読者に伝えたいことである、と序章で述べられている。

本書の読者は日本が世界最大の石炭輸入国であることを知って驚くだろう。既に産業としての炭鉱は終わったものだと一般に認識されていて(実際、坑内掘り炭鉱は1か所しかない)、炭

鉱は世界遺産に登録されるような「過去の遺物」として廃墟ブームの一翼を担うものでしかないと思われているかもしれない。

だが、そんな漠然とした先入観や思い込みを払拭してくれるのが本書であり、石炭研究からは多面性と意外性がもたらされるということを知ることができる。著者たちの熱い“炭鉱愛”から知ることができる。では、以下に本書の構成を掲載する。

序章 炭鉱から掘る日本の「奇跡」 中澤秀雄／嶋崎尚子

第1章 炭鉱遺産——なぜ人をこんなにも引き付けるのか 木村至聖

コラム 現存する炭鉱施設 木村至聖

第2章 炭鉱の歴史から学べること 島西智輝

コラム 炭鉱の生産組織 島西智輝

第3章 炭鉱閉山と家族——戦後最初のリストラ 嶋崎尚子

コラム 日本の石炭政策 嶋崎尚子

第4章 産炭地と「自治」——夕張はなぜ破綻したのか、どこに行くのか 中澤秀雄

コラム 炭鉱の身分制 中澤秀雄

第5章 炭鉱と労働運動——何を大事にするべきなのか 玉野和志

第6章 産炭地の女性たち——「母親運動」の評価をめぐって 西城戸誠

第7章 グローバルな共通言語としての炭鉱 中澤秀雄

産炭地研究会による炭鉱関係文献一覧

あとがき 中澤秀雄

索引

産炭地研究会のWEBサイトのメンバー一覧

によると、本書の編者・中澤が研究代表であり、他の5人が研究分担者である。島西が経済学、他は社会学を専攻とする。本書は炭鉱のすべてを知るための1冊となるはずだったが、技術に関する章が設けられていない。「重要なピースを欠いた」と序章でも述べられているが、ここが残念な点である。それを補遺するのが第2章のコラム「炭鉱の生産組織」であるが、機械の写真が掲載されていないために、初学者には理解しづらいものとなっているのが惜まれる。

それはともあれ、各章を簡単に紹介しよう。

第1章は文化遺産としての炭鉱の意味を問う。あるいは逆に、文化遺産の意味を問うことから、炭鉱の持つ豊かな可能性を照射する。今や廃墟として名高い観光名所となっている長崎の「軍艦島」は、地下の炭坑のみが世界遺産(明治日本の産業革命遺産)としてその価値を認められ、他方、観光客に人気の地上の建造物は世界遺産に登録されていない。これは意外なことかもしれないが、文化遺産からこぼれおちる多面的な価値があることが指摘されている。

続いて欧米での都市再生への取り組みが「創造都市」という概念とともに紹介され、ヨーロッパ全域で広がる産業遺産事業が取り上げられている。ここで紹介されているフランス北部の炭鉱町の事例は「エコミュゼ」(エコミュージアム)の1つと思われるが、産業(文化)遺産とミュージアムの関係性について言及されていないのは残念である。

そして最後に日本の炭鉱遺産へと再び論が戻され、日本の産業遺産化が西欧より20年以上遅れたために、多くの遺構が失われてしまったと述べられている。結論で著者が述べている、「文化遺産という桎梏」は、今日、観光資源としてのみ注目されがちな文化遺産が内在する問題点(文化財としての格付け・権威付け、保存と活用の両立困難さ)を鋭く指摘する貴重な論点である。

第2章は炭鉱の歴史を概観する。初めに「黒いダイヤ」と呼ばれた絶頂期の石炭産業について述べられているのだが、実はこの「黒いダイヤ」という言葉がいつから使われ始めたのかは書かれていない。第3章の嶋崎のコラムにある「戦後復興期には黒ダイヤといわれ」という文言と齟齬があるのではないかと。

石炭産業は需給変動に対して脆弱で、政府の保護なしには生き残ることが難しかった。だが、閉山を以て石炭産業が終焉したとみるのではなく、むしろ現在まで時間軸を伸ばせば、「生産第一・安全第二」から「安全第一・生産第二」へと至る歴史が見えてくるといえる。現在では日本の技術は海外に移転され、国内では輸入炭による発電が進んでいる。「日本の炭坑が培ってきた技術やノウハウ、そして景気変動への対応の試行錯誤の経験は、日本や世界に炭鉱があるかぎり生き続けるだろう」という結びの言葉は感慨深い。

第3章は炭鉱離職者とその家族の移動が生む問題を別括する。閉山に伴う大量の離職者がどのように産業を移動し地域を移動したのか、その家族はどのような移動を経験したのか。詳細な報告が胸を打つ。ただし、「高度経済成長を支えた炭鉱離職者の産業移動」というまとめには若干の疑問もわく。高度経済成長“が”炭鉱離職者の移動を支えた、ともいえるわけで、これはどちらが卵か鶏かという議論になるかもしれないが、この時期の労働力移動全体の中に占める炭鉱離職者の割合を数字を挙げて説明してもらえば、さらに説得力があったと思う。

離職者たちが移動先でも炭鉱時代と同じようなコミュニティを持続して共助を実現していたのと対照的に、その子どもたちは炭鉱出身者たちで仲良くなることがなかったという指摘は興味深い。

第4章は財政破綻した夕張市の事例を詳細に追っている。ルポルタージュを読むような面白さがあり、24年間続いた中田鉄治市政の弊害を描く。ハコモノ土建行政によって夕張市を破綻に追い込んだ中田市政には田中角栄の日本列島改造論を彷彿させるものがあるが、中田は自民党員ではなく社会党員だったという事実に驚いた。評者も夕張破綻のニュースはここ10年程頻繁に目にしていたが、その詳細は寡聞にして知らなかったもので、本章を読んでまさに「自治とは何か」を考えさせられた。炭都として栄えた記憶と経験がその後の市の破綻を導く要因になったとしたら、まさにここには未来への教訓が横たわっている。

第5章は最強と言われた日本炭鉱労働組合（炭労）の歴史に言及し、労働運動の現在を憂える論調が本書全体の中でも異彩を放つ。三池争議へと至る労働運動史を概観するのだが、最初に述べられているのは明治時代の南助松と永岡鶴蔵という「忘れられた」労働運動家である。1907年の足尾銅山の暴動を指導したとして裁判にかけられた2人は、実は暴動を抑え、労働者に品位を説く者たちだった。彼らのような主張を国家は踏みにじり、労働運動自身も忘れてしまった。戦後の三池争議を振り返りつつ、「労働組合は何を大切にすべきか」という熱いメッセージで締めくくられている。

ところで、p.140に軍隊が「戒厳令を敷き」とあるのは間違いで、足尾暴動時に戒厳令は敷かれていない（大江志乃夫著『戒厳令』岩波書店、1978年を参照）。また、p.144に「工（鉱）員と職員が同じ組合を結成する工職混合組合が一般化するなか、石炭産業だけは鉱員と職員が別々の組合に組織されることになる」とあるのはやや正確さに欠ける。たとえば大阪交通局の労組である大阪交通労働組合は職員を事実上排除して

結成されたし、金属機械産業でも戦前に組合があった企業では工員と職員が別組合を組織した（『大阪社会労働運動史』第3巻、大阪社会運動協会、1986年を参照）。また、1954年に結成された日本建設産業職員労働組合協議会はホワイトカラーの労働組合である。敗戦直後の多くの労働組合が工職を包含して結成され、そのうえで工職差別撤廃闘争が闘われたことは事実であるが、石炭産業だけが例外的に工職別組織であったというのは言い過ぎではないか。評者が例示したのは産別団体ではなく単組の例ではあるが、著者が炭鉱労組の特殊性を強調するあまり、読者に誤解を与えるおそれがあるのではと危惧する。

とはいえ、その炭鉱労働組合こそが、「国家に属さない人々の人権をどう保障するのかという」理念を生み出すのに最も力があつたという結語は感動的だ。

第6章も労働運動の章だが、ここで述べられているのは労組そのものではなく主婦の運動である。すわなち、炭労の指導下に組織された日本炭鉱主婦協議会（炭婦協）の、「泣く子も黙る炭婦協」と呼ばれた多彩で戦闘的な活動を紹介している。その評価を巡っては、従来フェミニストから「性別役割分業を前提とした活動」として批判を受けてきたとされているが、著者はそれに対して様々な評価を概括しながら、「『母親』による運動という点でさまざまな批判を受け、組織運営に苦勞しながらも、炭鉱で働く家族や産炭地のために多様な活動をしてきた炭鉱主婦会と炭婦協の存在を日本の女性運動の歴史上、忘れるべきではない」、今や中間集団が存在しなくなった地域社会で、ボトムアップから社会的な課題を解決する方向を考える際に炭鉱主婦会の歴史を「反省的に振り返ることが必要なのではないだろうか」と結論づけている。

著者の評価に評者も首肯したい。ただし、炭

婦協が先鞭をつけて1960年の「総評主婦の会全国協議会」の結成へと至ったこと、および、総評主婦の会活動における炭婦協の位置づけが数行でもよいので言及されていれば、と残念である。伍賀偕子著『女・オルグ記』（ドメス出版、2016年）には、主婦の会の活動がフェミニズムの影響を受けて主体変革を遂げていき、1978年には「男女の役割分担を見直そう」というテーマが初めて中央学習会で掲げられた、とある（「はじめに」から）。こういった全国組織の動向に炭婦協がどのように影響を与えたのかも知りたいところだ。

第7章はこれまでの章のまとめの位置にある。そして、炭鉱のグローバル性について言及する。炭鉱は世界中どこにいても共通の言語として理解しあうことが可能だという。そして、歴史を語るうえで炭鉱は重要な意味を持つ。産業革命から3世紀の長きにわたって石炭は世界のエネルギーの王者であり、いまだに欠かせない存在だ。「石炭から見る日本史」という叙述も可能という主張に瞠目した。

炭鉱研究の醍醐味をさらに味わいたい読者のために産炭地研究会メンバーによる著作一覧が巻末に付されている。このリストを読むだけでもいかに多くの研究がありえるのかがわかって軽い興奮を覚えるほどだ。

ところで、全章を通して1つ苦言を呈しておく、固有名詞の読み仮名が付されていないのが入門書としては残念な点である。とりわけ北海道の地名は読みにくいので、炭鉱研究者にとっては当たり前の地名でも初めて見る人には不明だから、ぜひルビまたは読みをつけていただきたい。炭鉱の業界用語も独特であるから、同じく読みをつけてほしい。

最後にもう1つ、アーキビストとしての評者からのリクエストを書いて筆を措くことにす

る。それは、産炭地研究会の大きな目的である「資料のアーカイビング」についてぜひ著していただきたいということ。本書にMLA（Museum, Library, Archive）の資料保存機関についての言及があればありがたかった。産炭地研究会には炭鉱博物館の学芸員が参加しているのだから、次回作ではぜひ、炭鉱アーカイブズについて調査結果を公開されたい。どの炭鉱の資料（会社側、労組側）がどこにどれだけの分量が遺されているのか、それは利用可能な状態になっているのか、また、個人が所蔵している炭鉱資料はどこにどれだけあるのか、といった情報を集約することが大きな課題と考える。現存する資料についての調査とともに、資料が失われてしまった炭鉱についてもリストを作ることが必要だろう。この点については嶋崎尚子「特集：鉱業アーカイブズの現状と可能性」（『ソシオロジカル・ペーパーズ』第26号、2017年3月、早稲田大学大学院社会学院生研究会）が、『データのアドレス帳』の確立・整備が炭鉱研究者に課せられていると述べていることが、図書館情報学やアーカイブズ学で言うところの「メタデータの整備」と同義であることを確認したい。研究者とMLAの情報専門家との連携が必須であるゆえんだ。

以上、無いものねだりのようなことも書いてしまったが、それだけ産炭地研究会の活動には期待するところ大なのである。

まだまだ炭鉱は多くの人に知られていない。その魅力を本書から存分に味わってほしい。（中澤秀雄／嶋崎尚子編著『炭鉱と「日本の奇跡」——石炭の多面性を掘り直す』青弓社、2018年7月、213頁、定価2,400円＋税）

（たにあい・かよこ 大阪産業労働資料館  
（エル・ライブラリー）館長）